群教セ	G17 - 02
	令4.281集
	多文化共生教育

日本語を使い、自分の力で学習に取り組むことができる外国人児童の育成

――「ぐんまのかけはし」のモジュール学習を取り入れた授業構成とＩＣＴの活用を通して――

特別研修員　加藤　敦子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

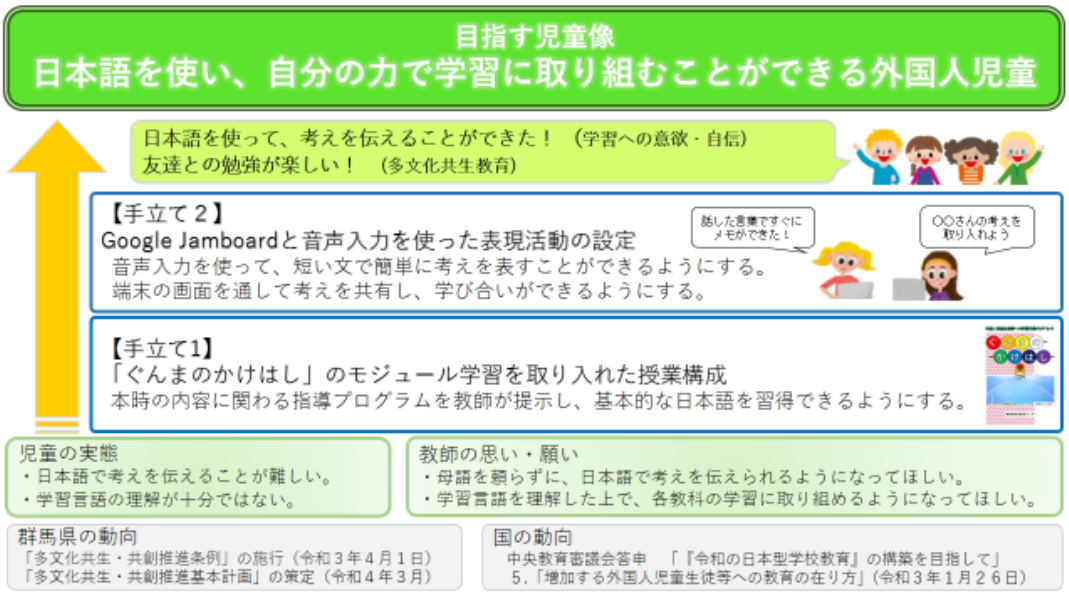
日本の学校では、「外国にルーツをもつ児童生徒」の受入れが増加している。その背景としては、両親の就業などで、子供を日本の学校で学ばせていることが考えられる。群馬県では、令和４年３月、「多文化共生・共創推進基本計画」が策定され、基本方針Ⅲでは、「誰一人取り残さない『多文化共生・共創社会』の実現」が掲げられている。

研究協力校には、６か国の外国籍児童が在籍している。生活言語は、おおむね理解し友達と関わりをもつことができるが、学習場面になると各教科で使われる学習言語の理解が十分でないため、日本語で考えを伝えたり、学習に取り組んだりすることに対して消極的な様子が見られる。

そのような課題に対し、外国人児童が安心できる学習環境を作る必要がある。学習場面においては、「国際教室」での個別の指導を行う。また、「ぐんまのかけはし」のプログラム学習を取り入れていく。「ぐんまのかけはし」とは、令和３年度群馬県総合教育センター長期研修員が作成した外国人児童生徒等への学習支援ガイドブックである。日常会話はできるが、学習するために必要な日本語がよく理解できていないため、在籍学級での学習が難しいと感じる外国人児童のために作られた、日本語中期指導プログラムとなっている。この「ぐんまのかけはし」を活用し、正しい日本語の習得を目指したい。また、Google　Jamboardを活用し、音声入力で簡単に考えを表したり、端末の画面を共有し考えを伝え合ったりすることを通して、自分の力で学習に取り組むことができる外国人児童の育成を目指し、本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

外国人児童が、日本語を使い自分の力で学習に取り組んだり、課題を解決したりすることができるよう、次の二つの手立てを設定した。

手立て１　「ぐんまのかけはし」のモジュール学習を取り入れた授業構成

「ぐんまのかけはし」のプログラムは、国語、算数、生活科等の学習で、よく使われる日本語を学ぶことができる。また、具体物の操作や、絵や写真などの提示等、体験活動を取り入れたプログラムもある。活用場面としては、１時間単位又は15分×３コマのモジュール単位で活用する。本研究では、導入場面にモジュール学習を取り入れることで、教科の学習につながる日本語を習得できるようにする。展開場面では、導入場面で学習した内容を基に本時の主な学習活動に取り組めるようにする。１時間の中で、日本語と教科の統合学習を行うことができると考える。

手立て２　Google Jamboardと音声入力を使った表現活動の設定

Google Jamboardの付箋機能を使った学習である。入力する際には、音声入力を活用する。文字を書くことに時間を要したり、書くことが苦手だったりする外国人児童にとっては、話した言葉がすぐに文字に変換されるので、児童の思いや考えを容易に表現することができると考える。また、話合いの場面では、画面を共有しながら表現したメモの内容を確かめたり、教え合ったりすることを通して、自分の考えをよりよい表現にまとめることができると考える。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　「ぐんまのかけはし」のプログラムをモジュール学習として扱うことで、日本語の学習と連動した当該学年の教科の学習を行うことができた。また、「ぐんまのかけはし」のプログラムは、短時間の学習の中に、児童の実態に合った課題を設定することで、学習内容の理解につながった。そして、展開場面では、導入時に学習した内容を想起し、見通しをもって教科の学習課題に取り組む児童の姿が見られた。

○　Google Jamboardのシートに入力する際には、音声入力を活用しながら、表したい内容を自分の力で表現することができた。考えを修正する際には、文字を書いたり消したりしないので、躊躇なく何度も入力し直し、より適した表現にすることができた。また、Google Jamboardのシートを共有し表現した内容について話し合う場面では、分からなかった内容を児童同士で教え合いながら理解したり、文のつながりに気を付けながら修正したりすることを通して、自分の考えを表現したよりよいメモを作成することができた。

２　課題

○　効果的な「ぐんまのかけはし」の取り入れ方については、プログラムをそのまま活用する方法と、理由を表す表現「～だからです。」を「～ので、～です。」のように文末表現から接続助詞の表現に置き換えるなど、学習内容によってアレンジする方法の二通りが考えられる。今後も、めあての達成につながる活用の仕方を工夫していく必要がある。さらに、児童の学習への意欲や自信につなげるため、「ぐんまのかけはし」のプログラムを活用し、日本語と教科の内容を組み合わせた統合学習を継続することが必要である。

○　Google Jamboardのシートを共有する際には、児童同士で考えを伝え合ったり、教え合ったりする場面を多く設定することで、少人数での話合いや意見の交流が活発にできるようにしていく必要がある。

実践例

１　単元名　　「絵文字の特長をとらえよう」
　　教材名　　「くらしと絵文字」教育出版「ひろがることば」（第３学年・２学期）

２　本単元について

本単元「絵文字の特長をとらえよう」は、段落と段落のつながりに気を付けて、説明文「くらしと絵文字」を読む。段落と段落のつながりを整理する上で、時を表す言葉に着目させたり、「第一・・・」「第二・・・」に気付かせたりすることが重要となる。

本教材を通して、児童は、身の回りの絵文字にそれぞれの特長があることを知り、その特長が絵文字の情報として役立っていることに気付く。そして、絵文字に関心をもったところで、身の回りで見付けた絵文字がどのようなものなのか、どのような特長をもっているのか、どのようなことを考えたのか、書き表したい内容をメモで整理する。そのメモを基に、説明する文章を書く。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1)　メモを基にして絵文字を説明する文章を書く際に、主語と述語の関係、修飾と被修飾との関係、接続語や段落の役割について理解することができる。（知識及び技能） (2)　相手や目的を意識して、身の回りで見付けた絵文字から説明したい絵文字を選び、「始め・中・終わり」の三つの段落構成で伝えたい内容を考えることができる。（思考力、判断力、表現力等） (3)　身の回りの様々な絵文字がどのようなことを表しているかなどについて教材文を基に考え、自分が見付けた絵文字について説明する文章を書こうとする。（学びに向かう力、人間性等）
評価規準	(1)　知識・技能 ①　主語と述語の関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解している。 (2)　思考・判断・表現 ①　相手や目的を意識して、経験したことから書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にしている。 ②　内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えている。 (3)　主体的に学習に取り組む態度 ①　文章を読んで理解したことに基づいて感想や考えをもち、自分が見付けた絵文字について説明する文章を書こうとしている。 ②　絵文字を紹介する説明文を、話し合ったメモの内容を基にして書き、相手に伝わるように進んで発表したり感想を伝えたりしようとしている。

過程	時間	主な学習活動
つかむ	第１時	・身の回りで見付けた絵文字を説明する文章を書くことを知る。 ・教科書の例文を音読し、三つの段落にどのような内容が書かれているのかの大体を知る。 ・自分が説明したいと思う絵文字を見付ける。
追究する	第２時	・教科書の例文を基に、見付けた絵文字の紹介について、メモを書く。
	第３時	・見付けた絵文字の特長について、メモを書く。
	第４時	・絵文字の便利なところやよいところなどについて、文章を書く。
まとめる	第５時	・説明文を書き、発表し、感想を伝え合う。

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全５時間計画の第３時に当たる。Google Jamboardの付箋機能を使い、絵文字の説明文を書くためのメモを作成する。「中」の段落の内容を、見付けた絵文字の特長について説明する文章のメモを書くことができるようにしていく。また、そのメモを書くために、理由を表す接続助詞「～ので」の活用の仕方を理解させていく。これらの手立てとして、以下（次ページ）の方法を設定した。

手立て１　「ぐんまのかけはし」のモジュール学習を取り入れた授業構成

本時では、導入場面で「ぐんまのかけはし」のプログラムの一つである「季節を感じよう」を活用する。内容は、「夏に楽しみなこと」から、児童の実態に合わせ「校外学習へ出かけるに当たり楽しみにしていること」にアレンジする。さらに、接続助詞「～からです。」を「～ので、～です。」の文型にアレンジし、展開場面での学習につながるようにすることで、本時のめあてが達成できるようにする。

手立て２　Google Jamboardと音声入力を使った表現活動の設定

展開①（めあての確認とメモの作成の場面）において、Google Jamboardの付箋機能を使い、考えを書き表すことができるようにする。入力の方法は、「音声入力」とし、自分の力で表現できるようにする。また、付箋に短文で表すことにより、伝えたい内容を明確にする。そして、二つの付箋を「～ので」を使って一文にし、理由を表す接続助詞を含む文章表現ができるようにする。

展開②（作成したメモを話し合う場面）では、Google Jamboardの画面を共有しながら、作成したメモについて発表する。その後、内容について話し合い、友達の考えを取り入れるなどして、よりよいメモが作れるようにする。

４　授業の実際

(1)　本時の導入　「ぐんまのかけはし」を活用した日本語学習

手立て１の「ぐんまのかけはし」をアレンジし、校外学習に出かけるに当たって、楽しみなことを、理由を表す接続助詞「～ので」を使って表現する活動を行った。本時では、前時で楽しみなことを書いた用紙を基に、「～ので、楽しみです。」という短文を考え発表し合った（図１）。児童Ａは用紙に「バスにのること」と書いていたが、そのまま当てはめると、「バスに乗ることなので、楽しみです。」となり、文の間違いに気付いた。そこで、「好き」という言葉を付け加え、「バスに乗るのが好きなので、楽しみです。」と自分の力で言い換えることができた。児童Ｂは、自力での文づくりが難しい様子だったので、児童Ａと一緒に考えようと促した。児童Ａは「きれい」という言葉を付け加え、「チョウがきれいなので、楽しみです。」という文を作った。児童Ｂに正しいかと問うと、うなずき納得した様子だった。ホワイトボードには作成した文を記し、正しい文章構成を理解させるために、児童に音読させた（図２）。このようなことから、モジュール時間（10分）で、「～ので、～です。」の文章表現を理解することができた。

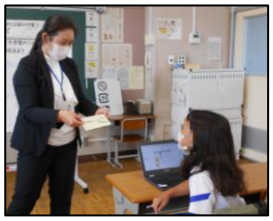


図1　用紙を基に短文を考える場面

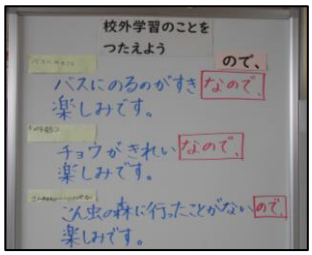


図2　児童が考えた短文

(2)　本時の展開①　めあての確認とメモの作成

本時のめあてを提示した後、学習の見通しをもたせるために、Google Jamboardのシート内の段落構成「中①」と「中②」の内容について例示した。中①では、児童が「くらしと絵文字」で学習した三つの特長のどれであるのか数字を入力した。次に、中②では、その特長を選んだ理由を、導入場面で学習した接続助詞「～ので、～がわかる。」を活用した文型で入力するよう伝えた。

児童Ａは、テープカッターに記されている接触注意の絵文字を確かめながら入力した（図３）。手に斜め線がある絵文字から、「手にバツがついている」「さわらないでください」と表現した。さらに、赤の斜めの線に着目し、「赤色」と「とても気をつけてください」と表現し、付箋を入力した（図４）。児

図3　メモを音声入力で表す児童A

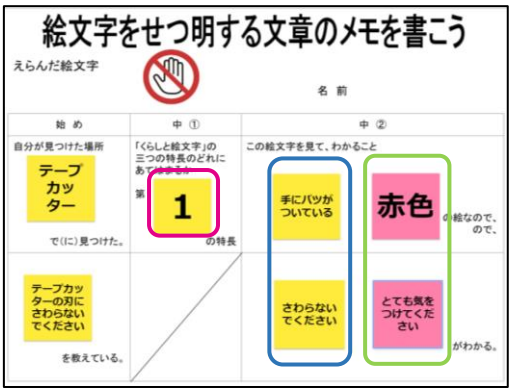


図4　Google Jamboardで表した児童Aのメモ

童Ｂは、ティッシュボックスの取り出し口にあるフィルムの部分を示すプラスチックのリサイクルマークを選んだ。児童Ｂはフィルム部分を示しているということがよく理解できていなかったので、実物を指し示しながら表現できるよう、個別の支援をした。しかし、矢印の意味は、自力で考えることができなかったので、話合いの場面で考えるよう促した。

(3)　本時の展開②　作成したメモを話し合う

まず、児童Ｂのメモについて話し合った。中①では、第一の特長「その絵を見たしゅんかんに、その意味がわかることです。」を選び、二人とも納得した様子だった。中②では、児童Ｂが分からなかったリサイクルを表す矢印の意味について話し合った。児童Ａは、「もう一回使える、リサイクル」と答え、その発言を受けて、児童Ｂは「リサイクルができる」と表現した。しかし、「～がわかる」という文章につながらないことを投げかけると、児童Ａは「リサイクルができるということ」と言い換え、児童Ｂはその考えを理解し、表現することができた(図５囲み)。

図5　話合いによって作成された児童Bのメモ

次に、児童Ａのメモについて話し合った。テープカッターは、「～がわかる。」に文をつなげるために、「さわらないでください」の後に「ということ」を付け加え、自分の力で体言止めに言い換えることができた（図６上）。二人の児童とも、メモを作成することができた。

(4)　本時のまとめ

説明文を書くために、メモを作成したよさを確認した。そして、児童はメモが完成できて楽しかったという感想をもつことができた。

(5)　本時後

完成したメモを基に、絵文字を紹介する説明文を書いた。教師の支援は、漢字や誤字脱字程度で、児童は自分の力で文章を書くことができた（図６下）。また、お互いに発表し、感想を伝え合うこともできた。

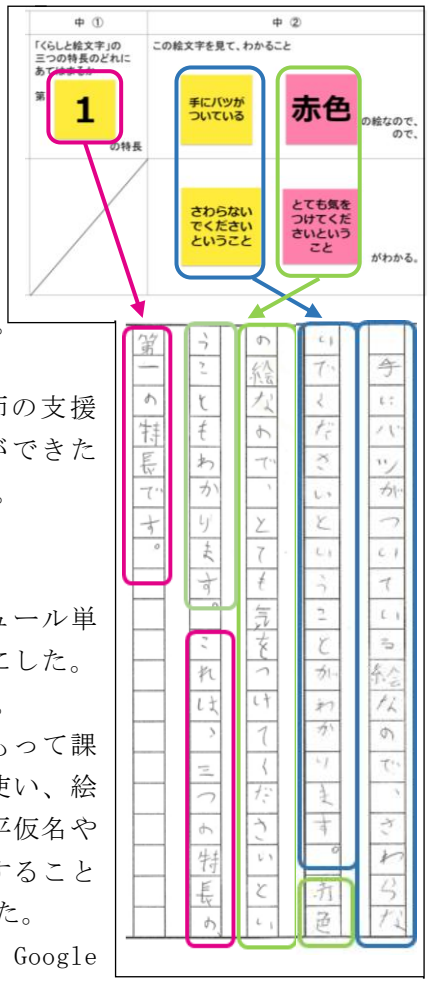


図6　メモを基に書いた児童Aの説明文

5　考察

導入場面では、「ぐんまのかけはし」をアレンジした内容をモジュール単位で取り入れ、「～ので、楽しみです。」の文型を理解できるようにした。児童は、前時のメモを基に、自分の力で短文を発表することができた。

展開場面では、児童は、導入場面の学習を想起しながら見通しをもって課題に取り組んでいた。そして、「～ので、～がわかる。」の文型を使い、絵文字の特長を表現した。その後、画面を共有し、話合いをしながら平仮名や漢字の間違いなどを気にせずに音声入力によってメモを容易に修正することができ、友達の考えを取り入れたよりよいメモを作成することができた。

課題としては、展開場面での児童同士の交流が挙げられる。Google Jamboardの交流のしやすさを生かし、画面を共有しながら児童が主体的に学び合う機会を増やしていきたい。また、「ぐんまのかけはし」のプログラムを取り入れた日本語と教科の統合学習については、今後も継続して行う必要がある。そして、自分の力で学習に取り組むことができる多くの外国人児童を育成したい。

6　資料

本報告書に掲載されているGoogle Jamboardは、Google LLCの商標又は登録商標です。